
幸せの入手法

clown

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せの入手法

【Nコード】

N7048Y

【作者名】

clown

【あらすじ】

平凡が嫌いな学生、永井健太ナガイケンタのところに、ある朝、手紙が届き、「あなたは選ばれました！」と告げられる。その後、電話がかかってきて、どこか見知らぬ世界に来て、幸せとは何かを考え、戦い、6日間を生き抜く。
がんばって更新したよ。

Prologue 招待

去年の春に一人暮らしをはじめた学生の「永井 健太」^{ナガイ ケンタ}は、今の生活に満足をしていなかった。別に、彼の財産が少なくなくて、食欲などの生理的欲求を満たされていないというわけではない。ただ、彼の生活があまりに平凡すぎたのだ。

彼は、平凡が嫌いだった。何事も他人とは少し違ったことをしたかった。小学校のころは、みんながランドセルなのに対して、普通のスポーツバッグを持っていたり、水泳の授業のときに、みんなが普通の海水パンツをはいてきているのに対して、水泳選手が使うような競泳用の水着を持っていたり、とにかく他人とは少し違うことをしてきた。

そんな彼も、中学生になるころには、できるだけ友達と同じことをするようになった。友達とできるだけ同じことをしないとみんなから、さげすむような目つきで見られるからだ。彼は、人から「あいつは自分より劣っている」と思われるのも大嫌いだった。

彼は、中学、高校とできるだけ友達にあわせるふりをして、友達から見えないようなところで、他人とは違うことをしていた。

彼はいつも運動でも、勉強でもトップクラスだった。彼が、他人から、「自分より劣っている」と思われないように努力をしていたのも理由のひとつだが、彼自身、才能があったというのも理由のひとつなのかもしれない。

そんな彼のところに、ある朝、一通の封筒が届いた。送り主は書いておらず、ただ大きな文字で「永井健太様」と書かれているごく普通の封筒だった。中をあけてみると、便箋が一枚入っていた。その便箋には、とてもきれいな楷書^{カインショ}で、「あなたは選ばれました！後日連絡を差し上げます。」とだけ書いてあった。

（なんだ、ただの悪徳商法か）と彼はその手紙を見て思った。そして、クシャツと丸めてゴミ箱に捨てた。

数日後、彼のところに電話が来た。電話をかけてきた相手は非通知だった。彼はとりあえず、電話に出てみる。

「もしもし」

「あつ、もしもし、永井健太様ですか？」

それは、幼い少女のようなかわいらしい声だった。

「はい、そうですか」

「こちら、あなたにいつも幸せを、フェリシダージ事務所と申します。」

ずいぶん事務的なしゃべり方だった。

「えつと、フェリシダージ事務所さん？聞き覚えがないんですけど、何の用ですか？」

「はい。前日お手紙を差し上げたと思いますが、あなたは当事務所から選ばれました。」

永井健太は手紙のことを思い出す。そして、悪徳商法かと思い、電話を切ろうとするが、ここで切ったら他人と同じだ。と思い、とりあえず話を聞いてみることにした。

「えつと、よくわかんないんですけど、何に選ばれたんですか？」

「それは、お答えしかねます。」

彼は、きつと、この後、賞金がもらえるけど、手数料が必要だから、数万払えつて話になるんだろうと思った。そして、何に選ばれたのかいえないのは、悪徳商法だつてばれないようにだろうと思った。

「じゃあ、選ばれたから何だつて言うんですか？」

「あなたは幸せを手にするチャンスを手にしました。」

「どういうことですか？」

「これから6日間、あなたには旅立ってもらいます。」

「どこに？」

「幸せへと導く都『シンフー』へ。」

彼はわけが分からなくなった。お金を請求するどころか、聞いた

こともないところに旅立つことになったらしい。どうせ、この後、そこへ行くために金が少しいるから払えってことになるんだろっけど、こんなのにだまされるやつなんているのか？と思った。

「えっと、それってお金とか、」

彼が発言しようとしたら、電話の向こうの声によってさえぎられた。

「それでは、まず、あなたの武器を決めてください。」

「え？」

「剣、銃はもちろん、手裏剣などの変わった武器も取り揃えています。ちなみに、選べる武器は最高で3つです。それ以上となると、レベルを上げてもらう必要があります。あちらについたらレベルを上げてそれから注文してください。」

彼は何で、武器が必要なんだ？だいたいレベルって何だ？と思いつつ、とりあえず選んでみた。面白そうだと思ったから。

「じゃあ、攻撃魔法と守備魔法などが使えるようになる魔法の杖と、竜巻を起こすことができるような巨大な十字手裏剣、あとは、水鉄砲の威力を上げたもので」

他人がなかなか選ばばなそうなものを選んでみた。

「かしこまりました」

あるのかよと彼はすこし驚いた。

「続いて、あなたの職業ですが、何になさいますか？」

「それって現実のと異なっていてもいいんですか？」

「もちろんです。」

「じゃあ、うーん、」

彼は少し悩む。

「自宅警備員で」

彼は他人が選ばばなそうな職業を選ぶ。だって、普通、武器持ってるんだから、勇者とか、賢者とか選ばない？

「分かりました」

それでもいいんだと彼は驚く。

「ちなみに、職業の変更は後からでも可能です。」

「そうなんですか」

何かここまできると、悪徳商法じゃないと思えてくる。

「それでは次のことを決めていただいたら、出発していただきませう。衣服は、着いた先に用意されているので、着いたら着替えてください。」

「分かりました。」

出発してどうやって？空港とかに行くのかな？パスポート持っていないよ？など彼の頭にたくさん疑問が浮かぶ。そんな中、電話の向こうの声が最後の質問を問いかけてきた。

「あなたが、幸せと思うときはどんなときですか？」

彼はこの質問の意味があまり分からなかったが、とりあえず答えてみる。

「自分が他人より上に立ち、他人とは違うと思えたときかな。」

「かしこまりました。ではいつてらっしゃい、幸せへと導かれるといいですね。」

そういつて電話は切れた。

どうやら悪徳商法じゃなかったみたいだなと彼は思っ、いつもどおり、大学に行く準備をする。そして玄関の扉を開けた。すると、なぜか、なんかのゲームに出てくる宿屋の部屋見たいなところに出た。

そして、自分の横には、さっき電話で言ったとおりの武器が置いてあった。

A t F i r s t チュートリアル

俺はいつたいどこに来てしまったんだ？

とりあえず、ここが俺の家の中ではないことは確かみたいだ。

しかし、おかしい。俺は、いつものように、単位をとるために、大学のつまらない授業を聞き流しに行こうと思つて、家を出たはずなのに、どうしてこんなところに来ているんだ？

足元を見ると武器見たいなおもちや？が落ちている。

どうやら俺が、電話でいった武器みたいだ。

ということとは、この、杖を使えば、魔法が使いちゃうってこと？

ちょっと興奮気味に、某ドラゴンクエ〇〇でおなじみの火の玉が出てくる呪文を唱えてみる。

「メ〇ー！」

しかし、何も起こらなかった。

静けさが、俺を辱める。つらい。

その後も、某最後のファンタジーの呪文や、とあるシスターさんが使ってた魔法なんかを唱えてみる。

しかし、何も起こらない。

もう知るかーって思ってた杖を投げると、その杖は床に落ちずに途中で消えた。

おお！魔法が使えた！って杖なくなったらだめじゃん！

って思った瞬間に、どこからともなく声が聞こえてきた。

「あなたの武器は、アイテムボックスに移動しました。」

アイテムボックス？何だそれ？

とりあえず、その声に向かって話しかけてみる。

「誰かいるんですか？ここどこなんですかね？俺、早く大学に行きたいんですけど。」

声からの返事はなかった。

しばらくして、また声が聞こえてきた。

「これからチュートリアルを行います。」

チュートリアル？なに言ってんだ？ゲームみたいなもんか？

とりあえず、チュートリアルという言葉とアイテムボックスという言葉で、RPG的なものの中に入ってしまったのか？と妄想好きの俺は推理する。

「まずは、アイテムボックスの使い方です。アイテムボックスから物を出すときは、出したいものをイメージしてください。そうすれば自動的に出てきます。なお、地図、選択した武器、ステータス計量眼鏡が最初からオプションでアイテムボックスに入っています。アイテムをしまう際はそこから辺に軽く投げてください。」

なるほど、だからさっき空中で武器が消えたのか。つまりイメージすれば、、、

俺は杖をイメージする。

おお！予想通り、杖が出てきた。

「次に、武器の使い方です。まずは、あなたが今、アイテムボックスから出した杖です。その杖を使うと魔法が使えます。しかし、最初は、ボム、ドロップ、ホーリーという魔法しか使えません。レベルがあがるともっと多くの魔法が使えるようになります。試しに一回使ってみてください。」

おお！そんな名前の呪文だったのか！

全部、違う呪文だった。

とりあえず、試してみる。

「ドロップ！！」

すると杖からたくさんの水玉が飛び出し、とげのように飛んでいった。

おお！俺、今、魔法が使えた！

人にはできないことができるようになって、少しうれしかった。

「他の武器の使い方ですが、実際に戦闘をする際にアイテムボックスから出していただければ、そのつどご説明しますので、よろしくお願ひします。続いて、この世界についての説明です。」

おお、俺の一番きになることだ。

「この世界は、あなたが生きている現実世界とは離れた空間、つまり、空想の世界です。ゲームの中と考えていただいて、かまいません。」

俺の、妄想が好きなことからでた推理が当たっていた。

「あなたには、この世界で、6日間生活してもらいます。ただ生活をするだけではなく、幸せを求めて旅してもらいます。旅の仲間には、このチュートリアルが終わったらいく広場で集めてください。」なるほど、つまり、仲間と一緒に旅をして、6日間の間にゴールへ向かえってことだな。面白そうじゃん。

「そして、忠告ですが、もしも、旅の途中で体力が0になり息絶えてしまった場合、二度と現実世界には戻れません。」

その、忠告で少し不安になった。

現実世界にもどれないだって？

「しかし、きつとあなたは幸せな生活をおくることができます。」
冗談じゃない。俺は、現実世界に戻るんだ！

絶対、死なない、と決心した。

「これで、チュートリアルは終わりです。それでは行ってらっしゃい。」

その直後、目の前が真っ暗になった。

そして、気がつくと、人がたくさんいる広場に立っていた。

Then 仲間

チュートリアルが終わるといつの間にか、人がたくさんいる広場に立っていた。

どっかの公園みたいだけど、すごくきれいで、どこか現実離れしている場所だった。

ボーっとしながらあたりを見渡していると後ろから声をかけられた。

「あっ、あの、、、」

後ろを振り向く。するとそこには、かわいらしい外国人風の女の子がたっていた。年齢は18歳くらい？

「えっと、言葉通じてますかね？」

すごいおどおどしながら聞いてきた。

「うん、通じてるけど、、、？」

首をかしげる。

「ならよかった！今、一緒に旅をしてくれる仲間を探してるんです。私、ポータルついでいいいます。あの、私、今、父が入院してて大変なんです。だから現実世界に早く帰りたくて、、、。だから、いっぱい仲間を集めて、速く幸せにたどり着きたいって思って、、、。」

おどおどしながら、そう言われた。

「それで、、、あの、、、もし、よかったら、、、仲間になっても
らえませんか？」

ほほを軽く赤く染めながら、上目遣いで言われる、、、

やばい、、、なんか、、、やばい、、、

「いいよ、、、」

「えっ？いいんですか？」

目を輝かせて聞かれる

「うん、、、」

「ありがとうございます！」

抱きつかれた、、、へ？

「ああ、すいません、、、つい、いつもの癖で、、、日本人の方で
すよね？えっと、、、なれなれしかっただですか？」

これが、外国の文化というやつか。へっ、鼻血が出そうになったぜ！

「あ、別に全然気にしてないよ。」

紳士の笑顔で答える。。。俺、にやけてないよね？鏡で確認したい、
、、、。

「それなら、よかったです。あのく、く、まだ、仲間はあなたしか集まってないんですけど、一緒に探していただけませんか？」

「ああ、そうなんだ。いいよ、一緒に探そう。」

「はい！」

なんか、めっちゃ笑顔で元気よく返事された。なんか、うん、萌えてやっつかな？

とりあえず、二人で、人を探してみる。

やっぱ仲間になってもらうなら強そうな人がいいよな。

そんなこといってたら、少し遠くに、めっちゃマッチョで怖い顔の人がいた。

あれかな？ボディービルダーの世界大会で結構いい成績とりましたって人かな？それとも裏の世界で、ゴホンゴホン！ここからは消されるかもしれないからやめとくね！

しかし、あの人は強そうだ。あの人がいれば、余裕で、どっかのハンティングゲームの、ジン〇ウガが倒せそうだ。

でも、あの人に話しかけるのは勇気がいるぞ、く、く、

と、そんなことを考えていると、ボヌールが話しかけてきた。

「あの人なんてどうですかね？」

ボヌールが指を指す。

彼女が指差した先には、なんか、めっちゃかっこいい感じのイケメンがたっていた。でも、ちょっと年取ってそう、、、27くらい？身体はそんなにこつくはなく、グローブをはめていた。腕の筋肉はありそうだから、、、ガンナーかな？

「まあ、いいんじゃない？」

とりあえず、話しかけに言ってみる。

と、思ったら、ボヌールのほうが先に話しかけていった。

「あの、すみません、、、もしよければ、、、仲間になってくれませんか？」

「うん？俺に仲間になってほしいって？別にかまわないけど、、、名前は？」

「私、ボヌールっていいいます。それで彼が、、、えっと、、、」

こちらを見て、ボヌールが困っている。

そういえば俺はまだ、彼女に名前を言っていなかったな。

「えっと、俺、ナガイケンタ永井健太って言います」

「ふーん、今は、二人で旅をしてるんだ。」

そういつて、男は少し考える。

「あの、、、仲間になってもらえませんか？」

ボヌールが男に聞く。

「いいよ。君たちの仲間になってあげる。俺の名前は、リオルって
いうから、よろしく、ボヌール。」

男は、はにかんで手をボヌールに差し出す。

「ありがとうございます！」

ボヌールは男の手を握る。

あれ？俺、蚊帳の外？

「そして、永井健太君。」

男はこちらに手を差し出す。

「あ、ありがとうございます。」

手を握る。

こうして仲間は3人になった。

そして、なんだかんだで、このメンバーで一回冒険に出てみるこ
とになった。

広場には、看板があった。

その看板には、「こちら、シフルの出口。メルリア砂漠」と書い
てあった。

とじあえずそちらに可かじ。

T h e n 仲間（後書き）

かなり、話を変えました、、、
まあ、読んでた人ごめんね。ってことで。

下心はできるだけ出さない方針で！

看板のほうに向かって歩いていくと、舗装されていた道が、だんだん砂に変わっていった。

そして、しばらく歩くと道に赤いラインが引かれていた。

その横には看板が立っており、「この先メルリア砂漠」と書いてあった。

とりあえず進んでみる。

あたりには木が生い茂っているが、地面は完全に砂だった。

しばらく進んだところで、何か異変を感じる。

周りがおかしい。

さっきまでは、少なからず人がいたのに、今では一人もいない。

「何か、妙だな、、、」

リオルがぼそっとつぶやく。

「いやな予感がします。」

ポヌールが言う。

そしてしばらく歩くと、人の屍が道端にいくつか落ちていた。
ぎよつとする。

現実世界では見ることはないものだ。

とりあえず、そこら辺で、誰かいないか探す。

もしこのまま進んで、突然巨大な魔物とかが現れたら、ひとたまりもない。

こつというのはまず、情報収集をするべきだ。

しかし、誰も見あたらない。

そうやって人を探しながら進んでいくと、一体屍の横で、泣きじゃくる子供がいた。女の子だ。

「どうしたの？」

たとえば、幼い子供でも、情報を得られるかもしれない。

「えぐつ、、、あのね、お母さんとね、お仲間さんとね、向かってたらね、穴があってね、、、ひっく」

そしてまた、泣き出してしまった。

穴？なんだろう。

「泣かないで。それで、どうしたの？」

「ひぐつ、、、お母さんがね、私を投げてね、それで、足が、まきついて、、、動けなくなってるね、、、」

そしてまた、泣き出してしまった。

大体読めたぞ、穴から魔物が出てきたってことだな。で、お母さんは子供を助けるために遠くへ投げたけど、殺されちゃったってことかな？そうなるよ、この女の子はかわいそうだが、どうすることもできないしな、、、

「えっと、、、」

少し困る。

悩んでいたら、ボヌールが後ろから女の子に向かって声をかけた。

「ねえねえ、あなた、名前はなんていうの？」

「私？私は、オルゼーって言うの。」

「じゃあ、オルゼーちゃん。おなか空いてない？」

少女は、泣きながら、こくりとうなずく。

「じゃあ、何か作ってあげるよ。」

そういつてボヌールは、近くに生えていた草とかを調べ始めた。

そして、その草とかをむしって、アイテムボックスから、銃を取り出した。

そして、草に火をつける。

その後、そこら辺に生えていた木から実をとってくる。

よくみたら、りんごじゃないか。

それで、りんごを火であぶる。

すごく、ダイナミックな調理ですね。

しばらくあぶって、

「はい、どうぞ、焼きりんごです。厚いから気をつけて食べてね」

オルゼーに渡す。

熱そうだけど大丈夫？

「ありがとう、お姉ちゃん。」

そういつてオルゼーは焼きりんごをかじる。

「おいしいー！」

オルゼーはにっこりと笑う。

「ならよかった。ところでさ、私ね、ここってすごく危ないと思う

んだ。だから、オルゼーちゃんも私たちと一緒に来ない？安全なところにつくまで、、、、」

「でも、お母さんが、、、、」

オルゼーは、屍を見つめる。

あの屍はお母さんだったのか、、、、

「えっと、でも、お母さんは、オルゼーちゃんに生きててほしかったんだと思うんだ。だから、生きるためにも、どこか安全なところまで、一緒に行こう？ね？」

オルゼーはしばらく考える。そして、

「うん、お母さんのためにもいっしょに行く。」

オルゼーは、コクリと首を縦に振った。

そうして、オルゼーが仲間に加わることになった。

First battle 砂漠の穴 【？】

オルゼーを仲間に加え、先に進む。
だんだん、周りの木々が減ってきた。

そしてこの砂漠がどれほど広いのかを見渡せるようになってきたところで、オルゼーが叫んだ。

「待って！」

「どうしたの？オルゼー？」

オルゼーが小刻みに震えていた。

「さっきの穴、このあたりにあったの。」

あたりを見渡してみる。

すると、少し先の方に小さな穴が見えた。いや、実際は大きな穴なのかもしれないが、ここからだ小さく見える。

「あの、穴のこと？」

ボヌールが指を指して聞く。

「うん。でも、あれ？あの穴、さっきより遠いところにあるよ。」

穴が、さっきよりも遠いところにある？

普通、生物が獲物を待ち構えて穴を用意していたのなら、同じところに穴があるはず。それにもしその生物が移動していたとしても、きつと何か跡があるはず、、、それなのに何にも痕跡が見当たらない。

どうして？

少し奇妙に思ったがあえて気にしないで、穴のほうへ向かう。

いずれにせよ、戦わなくてはいけないと思うから。

この穴を掘ってる魔物は、どうやら穴ごと動くことができるようだ。だから、きつと俺たちが回り道をして回避したとしても、きつと、追いかけられる羽目になるだろう。

そして、オルゼーのためにも敵を討たなければならない。

ボヌールもリオルもどうやら同じ気持ちらしく、何も言わず僕に歩いてきてくれた。

穴に近づくにつれて、穴がどれくらいの大きさなのか分かってきた。

それは、とてつもなく巨大だった。

どれくらいおおきいかというと、六本木ヒルズを横にして入りそうなくらいだ。

そして、穴まであと数十歩というところで立ち止まる。

何か音がする。

ずずず、ずずずと何かがつめくような音が。

ごくりとつばを飲み込み、武器を用意する。

リオルは予想通り、どっかのSFでできそうな銃を用意した。

ボヌールは、ファンタジーで出てくるような剣を用意した。

そして俺は、、とりあえず魔法の杖を出してみる。

『えっ？杖？』

ボヌールとリオルがこの緊張感たつぷりの状況で、二度見をした。

ちょっとシユールな光景だ。

「うん、魔法の杖だけど、なにか？」

ほかの人が驚くようなことができちゃったとうれしくなった俺、、
変わってるかな？

「へ、へえ〜」

驚きが隠せない二人は軽く動揺しながらも、穴のほうに向き直る。

「じゃあ、いきますか。」

リオルが軽い感じで言った。

オルゼーが震えている。

「安心して。俺たち絶対死なないから。そこで待ってて。」

オルゼーを安心させるために、軽く笑顔で言う。

オルゼーがこくりとうなずく。

そして、俺が手始めに、呪文を唱える。

砂の中にいるんだから、

「ドロップー！」

水玉が中に浮く。

それが急にとげのようになり穴の中に向かっていく。

ずと音になる。

そして急に音が鳴り止んだ。

とたん、穴から足が大量に飛び出てきた。

たこの足のようなかんじだ。

その足をめがけ、リオルが銃を撃つ。

その銃はすごい威力だった。反動だけで、そこら辺の砂が一気に舞い上がった。

砂から出てる足の一本がちぎれる。

キグアアアアア

この世のものとは思えない鳴き声が響き渡る。

「くっ」

思わず耳をふさいでしまった。

その瞬間、一気に地面が盛り上がった。

そして、魔物の本体が現れた。

それは、すごくでかかった。

さっきの穴がなくなってた理由はそれだった。

この魔物がこの砂漠だったからだ。

この砂漠はもともと、低い土地だったが、この魔物が居座るようになったせいで、一気に土地が高くなっていった。しかし、魔物の口の部分は砂がなくなってないと、呼吸ができない。というわけで、魔物の口の部分だけ、ぽっかりと穴が開いていた。そして、この魔物が動くと、この砂漠はすべて魔物の身体のうちなのだから、砂漠全体が動き、まるで穴が移動したように見えていたのだ。

すべての地面が一気に盛り上がる。

ムカデのように長い身体だ。

「ドロップ！ドロップ！ドロップ！」

大量に水玉ができ、大量に魔物にとげ状になって襲い掛かる。

その水玉が魔物に当たるたび、すごい悲鳴が響き渡る。

そして、地面がグネグネと動く。

下手をすれば、バランスを崩して倒れてしまいそうだ。

リオルは、銃を魔物の口にめがけ撃っている。のどをつぶしてこの魔物の声をどうにかすると、歯や、さっき出ていた、足ではなく、食べるために動く、、、なんと叫びたらいいんだらう、、、ひげ、

、そうだ、ひげを破壊する気なのだろう。

ポヌールはオルゼーが魔物から落ちないように、守っている。

とりあえずこのままダメージを与え続けよう。

しばらくそうやって戦闘を続けていると、魔物の様子がだんだん変わっていった。

そろそろ、倒れるか？

そう思っていたら、その期待を完全に裏切る展開となった。

魔物は倒れるどころか強化しだしたのだ。

そう、魔物は脱皮を始めた。

今、いる場所がどんどん下がっていく。

「おおっと」

みんながそれぞれに転びそうになりながら、必死で立っている状態を維持する。

オルゼーは今にも泣き出しそうだ。

魔物が脱皮を終えると、魔物の全体像が見渡せるようになった。

魔物が脱皮したせいで、今までいた位置の高度が一気に下がり、魔物の大きさが分かるようになったのだ。

しかし、このままでは魔物につぶされてしまう。

あわてて、どんどん魔法を放つ。

リオルも銃をがんがん撃つ。

すると、魔物が動かなくなった。

やったか？と思うと、魔物が飛び出した。

羽を広げたのだ。

そう、さっきのは脱皮ではなく、羽化だったのだ。

魔物の生態はよく分からないが、きっとさなぎの過程がないのだから。

「くっ、これはまずいか？」

First battle 砂漠の穴 【？】

羽を広げた魔物の姿は先ほどまでとは大違いで、とても美しかった。

海〇コーポレーションの海〇社長が、「ふっ、、、ふつくしい、、、！」と喋ってしまうくらいに美しかった。

蝶のような姿をしていて、羽を羽ばたかせるたび、光の粒のようなものが当たりに飛び散り地面すれすれのところで消えた。

しかし、鳴き声は変わらず、頭の中を切り裂くような恐ろしい声を発していた。

言葉による効果音で、その鳴き声を正確に表すことはできないと思う。が、あえて、あらわすというのなら、「ギャアアアア」とか「キエエエエエ」とかだろう。

まあ、とにかくその魔物は美しくも恐ろしかった。

とりあえず、俺は考えた。この魔物にどうやって攻撃をするかを、、、
下手に近づくときつと羽ばたきによる風で吹き飛ばされるだろう。やつは大きい。

だから、遠距離攻撃でいくのが一番だが、、、この魔法の杖による魔法で、やつのところまで届くのか？

この魔法の、射程距離は大体5mくらいだと俺は思う。今までそうだったからだ。

俺の今いる位置は、やつから20mくらい離れている。だから、

やつに近づかなければいけないが、そう簡単にはいけないだろう。なぜなら、俺が今いる位置でさえ、台風がきたときみたいな風が吹き付けてくる。ここが限界だろう。

とりあえず、やつはまだ移動をしてないから、風で吹き飛ばされる心配はないだろうけど、、、
どうやって攻撃するか、、、

とりあえず、リオルの武器に頼ってみる？

リオルの武器は、射程距離がきつと長いだろう。

しかし、リオルの武器の威力が高めでも、一人では倒せないはずだ。

「あつ、そつだ。」

俺は小声でつぶやいた。

もう二つの武器があったことを思い出した。

アイテムボックスから、馬鹿でかい十字手裏剣を取り出す。
と、同時に説明がながれる。

「十字手裏剣です。使い方は、ブーメランを飛ばすように投げ対象物にダメージを与えます。自分の周りでぐるぐると回すと、強い風が発生します。」

なるほどな。

ということは、コレをまわしながら進んでいけば、あいつの風にも負けないんじゃないか？

そう思い、自分の周りでぐるぐると手裏剣を回す。

その光景を、ボヌールとリオルとオルゼーが興味深そうにみている。

「やっぱり、日本人はみんな忍者って言うのは本当なんだ。」

「びっくり〜。」

「いや、それはちがうぞ。ボヌール。オルゼー。日本人はみんな侍なんだ。彼も侍なんだよ。だから手裏剣を使ってるんだよ。」

「えっ？でも私、侍は手裏剣を使わないって聞きましたよ？」

「何を言ってるんだボヌール。忍者はしのぶだけだよ。武器は使わないよ。」

「えー？」

「私は、お姉ちゃんが言ってる事が正しいと思う。」

「やっぱりそうだよー。オルゼー。」

「いやいや、二人とも間違ってるって。侍しか武器は使わないのよ。」

外国人って、侍のこととかあんまり知らないんだね。

「三人とも間違ってるよ。手裏剣を使うのは忍者だけど、僕は忍者じゃない。」

三人とも「？」な顔をしている。

まあいい、今はそんなことを説明してる場合じゃない。

俺は、手裏剣を大きく回す。するとほんとに強い風が吹き始めた。よしこの調子なら、、、

そして、そのまま、前へ進む。

少しずつ、慎重に。

風が周りで強く吹いているため、やつからの風は当たらない。

「なるほど、そうやって近づいていき攻撃って訳か、、、」

リオルが納得の表情を浮かべている。

だんだん、距離が短くなってきた。

そして、俺はあることに気づいた。

・近づいて、どつする？

確かにこの方法なら、やつに近づけるが、両手がふさがってるじゃないか。どうやって攻撃するんだ？

後ろに回る？

回転されておしまいじゃないか？

いやでも、とりあえずそれで行こう。

どンドン近づく。

そして、やつとの距離がゼロになったとき、あることが分かった。

何も攻撃しなくてもいいことを。

やつが、俺の周りで吹いている強い風に巻き込まれて吹っ飛んだのだ。

魔物は、かなり遠くのほうへ飛び、地面にたたきつけられた。

ドスンという鈍い音が響きわたる。

そして、魔物が起き上がることはなかった。

「やったー！」

ボヌールが喜ぶ。

「倒したー！」

ボヌールがオルゼーより喜ぶ。

なんかオルゼーのセリフ奪われてる？

とりあえず、俺がみんなの近くに戻る。

「やったな！」

リオルが笑いながら言う。

すると、オルゼーが抱きついてきた。

「ママの仕返しをしてくれて、ありがとうおにいちゃん！」

そして、おでこにキスされた。

「おいおい、顔赤くなってるぞ」

リオルが笑いながら言う。

「べ、別に赤くなってなんか、、、」

「え？照れてるんですか？」

ポヌールまでからかってきた。

ちよっと、悔しい。

まあ、その後、一通り喜んでまた先に進むことになった。

First battle 砂漠の穴 【?】 (後書き)

べ、別に幼女に発情なんかしないんだからね！ゴホンゴホン

First break 枯れた町？

メルリア砂漠は、なかなかの広さだった。しかし、RPGゲームみたいにどこもかしこも魔物だらけというわけではないので、普通に歩けば簡単に砂漠を通り越せる。

途中で休憩を入れつつ、あの大きな魔物がいたところから15キロほど歩いたところで、遠くのほうに人工的な建造物がたくさん集まってるのを発見した。きっと町なのだろう。

オルゼーの安全な居場所を探すためにも、とりあえず町に向かって歩く。

「いやー、こんな砂漠の中に町があるなんてね」

「まあ、人間はどこにでも住み着く。そして、他の生物の居場所を奪い取っていくんだ。」

「なんで、そんなしゃべり方してるの？リオル？」

「そんなとは、どんなだ？」

「なんというか、ポエムを朗読しているような、詩人になりきってるような、」

「私、さつきリオルさんが何かを紙にメモしてるのみました！」

「ほう、オルゼー。リオルは何を書いていたんだい？」

「えつとですねー、、、」

オルゼーがボヌールの耳に向かって、小声で話す。

「ま、まさか、あのことを、、、」

リオルの顔が青ざめる。

「キヤー、リオルクン、ポエムナンテカイテルノー！」

あえて、からかうように棒読みで、ボヌールが叫ぶ。

「くっ、それだけは、俺の胸の中の黒歴史としてとっておくはずだったのに」

「ふむふむ、あなんとこの世は無情なのだろう、こんなに幼い子でさえ、、、」

「読むなー！」

リオルが必死で止める。ここまで、あわてるリオルはじめてみるかも。つてか、まだ旅し始めたばっかなんだけどね。

まあ、その後もボヌールが、口に出すのも恥ずかしいようなりオルのポエムをただ淡々と朗読しながら歩く。もちろん、リオルはやめさせようと必死だ。そのうちに、町についていた。

町の光景は、決してきれいとはいえなかった。

廃れている。そう、ひと言で言うなら、廃れている町だろう。

建物はほとんどが風化して、看板などのたてつけは全部がたがただ。

「こんなところに人がいるんでしょうか？」

ボヌールが不安そうに聞く。

「きつといるだろう、所々、風化してない部分がある。」

リオルはなかなか、洞察力が優れている。

確かに、あちらこちらに、ちらほらと、植えたばかりのような鉢植えや、生活用品が見受けられる。

とりあえず、俺たちは町の中で人を探してみることにした。

First break 枯れた町？

とりあえず、オルゼーを一人にするわけにはいかないの、ボヌールにオルゼーを預け、3手に分かれて、人を探すことにした。

「誰かいませんか？」

町の入り口から、それほど離れてないところで、家らしき建物に入り、人がいないか叫んでみる。しかし、返事はない。

「誰か、、、」

もう一度叫ぼうとしたとき、後ろからトンと背中をたたかれた。一人の少年が立っていた。

「何してるんですか。ここは僕の家です。父母は今出かけてますよ。」

少年は、何の強弱もつけず、ロボットのようなしゃべり方で言った。表情も無表情だ。

「えーっと、僕は旅をしているんだけど、この町のこと、全然知らないから、案内してくれないかな？」

少年に聞いてもだめかな？最近の子供はガードが固いからな・・・子供に「道教えて」って言ったら、軽く逃げられる時代だからな・・・でも、ここは現実世界じゃないんだ！もしかしたら、、、などと考えつつ、少年の返事を待つ。

「いいですよ。」

少年の返事は実にあっさりしていた。そして、やはりロボットのよくな無表情なしゃべり方だった。

とりあえず、離れていたボヌール、リオル、オリゼーのことを少年に話し、つれてくると伝え、三人を探しに行く。

三人とも、まだそれほど遠くへ行つてなかつたので、すぐに見つけることができた。

少年の元に戻ると、少年はさっきとまったく同じ場所に立っていた。やはり無表情で。

「待たせたね。じゃあ、この町の案内をしてくれないか？」

少年はコクリとうなずき俺たちの前を歩いた。

.....

少年は黙って、ただスタスタと歩く。それに黙ってついていく。

「俺たちはこれからどこに連れて行かれるんだ？」

リオルが少年に聞こえない程度の小声で言う。

「連れて行かれるって.....これから町を案内してもらうんだ

よ。」

とりあえず、小声で返す。

「んなこといってもよ、あいつ、一言もしゃべらねーぜ。なんかあるんじゃないの。」

「そんなわけないって。だって、ただの男の子だよ。」

「ただ男の子だからって安心するわけにはいかねーよ。他人を見たら泥棒だと思えって言うだろ？」

「ここがこの町唯一の道具屋です。」

少年がいきなりこっちを向いて言ったもんで、二人して、びくつとする。

「へ、へえ〜」

「この町にはこれくらいしかないんです。国会も、会社も、駅も、道も、観光名所も公園も、全部、つぶれてしまったんです。今じゃ砂の下です。だからみんなこの町を出て行った。今この町に住んでいるのは、僕たち家族とこの道具屋くらいでしょう。僕たち家族は、ここから、それほど遠くない村で働いてるんです。お金がなくて、引越すことができないから。」

少年はなぜか、はにかむ。今まで笑わなかったのに。

「あなたたち、旅をしているんでしょう？それならきつと、あなたたちは幸せを求めているんですね？」

少年が問いかけてくるので答える。

「う、うん。」

「それなら、あなたたちの求める幸せって何ですか？」

「えつと・・・」

幸せがなにかなんて分かるわけがない。

「俺は、金だと思う。もちろんチップなんかじゃねえ。ドカンとした札束の山だ。一生遊んで暮らせるくらいだな。」

リオルが笑いながら答える。

「お金、ですか・・・」

少年がうつむく。

「確かにお金はいいですね。お金があればこの町も、立て直すことができるでしょう。でもね、それじゃあだめだと思うんです。私たちの町は、もともとすごくお金持ちでした。大きな化け物がこの町の近くに住み着くようになったんです。自然には生まれない、人工的な大きな化け物がね。」

大きな化け物って、あの砂漠にいたあれか？

「その、化け物ってムカデみたいなやつか？」

「はい。あの化け物は、もともとすごく小さい虫なんです。多少

生態系が崩れただけじゃ、あんなおおきくはならない。人工的に作られたとしか思えません。」

「その化け物なら、ここへ来る前にやっつけたけど、、、、？」

「えっ？」

少年の目が少し輝いたが、すぐに元に戻った。

「でも、また化け物は現れるでしょう、、、、」

「どうして？」

俺が聞く。

「ここから、数十キロ東に行ったところに、とある町があります。その町は、私たちの住んでいる町のことをよく思っていません。この町より広い土地を持っているのにこの町のほうが裕福だったからです。人間の嫉妬心というものです。だから、あの町はこの町が復興することがないようにまた化け物を生み出し、この町の近くに放つでしょう。」

「でも、いくらこの町のことをよく思っていないといっても、そこまではしないんじゃないですか？」

「いいえ、彼らならやります。彼らは近くの町に、大きな化け物を放って、枯れさせ、自分の町が一番になるようにしてきたんです。」

「その町の名前、なんていうんだ？」

リオルがさっきとはまったく違った真剣な面持ちで聞く。怒っている。きつと、、、

「その町の名前は、、、アビディティ。」

リオルがこちらを向く。その町に行くという意味だろう。

静かにうなづく。

その後、少年に、礼を言って町を出た。アビディティに向かうため、、、

F i r s t b r e a k 枯れた町？（後書き）

ちよつとだけ内容をチェンジしました

First crime 強欲 1

アビディティに向かうために少年がいた町を出て、砂漠の中を数キロ東に進む。

すると、建物が見えた。

それは、威圧感のある大きなレンガの壁だった。

ゴゴゴという効果音が聞こえてきそうだ。

「どうやら、ここみたいだな。」

リオルが壁の上のほうを見上げて言う。

「どうやって入りますか？」

ボヌールが聞く。

確かに、そこには壁があるだけで、入り口がなかった。

どうやって入るか考えながらあたりを見渡すと、リオルが何かを手に持っていた。

大きなハンマーだった。

リオルの武器なのだろう。

リオルがおおきく振りかぶる。

そして壁にたたきつける。

丑三つ時に、五寸釘をたたきつけるように。 え？

大きな音をたてて、壁が崩れる。

ガラガラガツシャーンとはならなかったが、というかなるわけないし、あんな効果音がほんとに流れると思っっているの？ばかなの？

壁が崩れると同時に、十人くらいの武装した人（兵士だと思っけど、まだ分からないから言わない）が駆けつけてきた。

「お前ら！何者だ！」

「何をしにきた！」

「このまま何も答えないならば敵とみなす！われわれアビディエイの兵士は全力を持ってお前らを排除する！」

兵士A、B、Cみたいな人たちが、計算されていたかのように、それぞれに言う。

「俺たちは、ここから西に数十キロ行ったところにある町から来たもんだ。」

あの町の名前をまだ僕たちは知らないの、俺はとりあえず、位置を説明してあの町を伝えようと、あーもう面倒くさい！

すると、兵士たちが突然笑い出した。

「ハッハッハッ！お前たちはウィザーから来たのか。あのすごく

貧乏な町から。それで、お前たちは何をしに来たんだ？チップがほしいのか？壁を壊したやつになんかやらんけどな！ハッハッハッ！」

一番がたいがよさそうな兵士が前に出てきていった。

これには我慢できず、リオルが殴りかかろうとすると、

「ふざけんな！」

と、後ろから大きな声が響いた。

聞いたことのない声だった。

「あんたたちが悪いんだろーが！あんたたちが、あんなでかい化け物を作って、放ったんだろーが！」

後ろを見ると、黒髪のアートで、今風な格好をした大和撫子って感じの女の子がたっていた。

怒りつつも泣きそうな顔をしていた。

兵士は、その言葉を聞き、フンと鼻で笑った。

「悪いが、おじょーちゃん。どこにそんな証拠があるって言うんだい？」

すると、その女の子は、さっと、ポケットから写真を取り出した。

「これは、私のインスタントカメラで撮ったあの化け物の背中表皮の写真。」

こちらに見せ付けてきた。

そこには、あの化け物の表皮に白い紋章が描かれていた。

「この紋章はあなたたちの国の紋章でしょ？」

兵士たちが顔をしかめる。

「うっ、うるせー！そんなの偽造だ！俺たちを、陥れようってんだな！そうはいかねーぜ！おい！」

がたいのいい兵士が、一人の兵士を自分の元と呼ぶ。

そしてにやりと笑う。

「お前らへの攻撃許可が王から下った！処分させてもらっぜー！」

数人の兵士が、剣を持って飛び掛ってきた。

俺は、善心がはたらいたため、ノーキルでクリアするために風で吹き飛ばす作戦を取ることにした。

つまり、手裏剣をアイテムボックスから取り出した。

ぐるぐると回すと同時に大きな風が巻き起こる。

それと同時に、兵士が一気に吹っ飛んだ。

「なん、、、だとお、、、！」

がたいのいい兵士が、風を必死でこらえながら、驚愕の表情をしている。

とかいつてるが、実は、視線は後ろの女の子が穿いていたスカートのほうに重点的に目がいつてたりする。が、それは秘密だ。

え？男のロマン？残念ながら、女の子はちゃんと抑えていた。

あと少しなだけどな。

捲れる、捲れると、どんどん力を増していく。

もちろん、風の方向は、兵士のほうに向けてる。しかし、反動で、風が女の子の方にも行く。

って、俺落ち着けよ！

気がつけば、目の前には一番がたいのいい男しかいなかった。

他の兵士は全員吹っ飛んだのだ。

下心って怖いなと俺は思った。

First crime 強欲 1 (後書き)

bibukoさんの「呪いのすすめ」って曲をニコ動で見るといいよ。

途中で途切れたのには理由があった。親フラというね。

下心ごめんなさい。

「おっ、おぼえてやがれ〜！」

最後まで残っていたがたいのいい兵士がどっかの下っ端のセリフをはいて、町のほうにかけていった。

「大丈夫でしたか？」

黒髪の女の子にボヌールが聞きに行った。

「ありがとうございます。さすがにあんなに多くの兵士に襲われたら、やられてしまうところでした。」

女の子がニコツと笑ってこっちをみる。

「私、飛鳥^{アスカ}つて言います。あなたたちは？」

「私は、ボヌールといいます。」

「俺はリオルだ。」

「わたしは、オルゼーです。」

「僕は、永井です。」

なんか、こうして名前を並べてみると、自分だけスケールが小さい気がする、、、

「なんで、あなた達は、この街の兵士達と戦ってたんですか？」
飛鳥が不思議そうな顔をして聞く。

「えっと、それはある町からこの町の事を聞いて、、、、、」
と、詳しい事情を話そうとしたとき、どーんという音が遠くのほうから鳴り響いた。

「なんだ？」

リオルが音のしたほうを睨む。

砂煙がたっていた。

その中から、一匹の巨大なムカデが現れた。

そのムカデはだんだんこっちに近づいてくる。

「やばい。来るぞ！」

リオルが銃を構え、ボヌールが剣を構える。

そして、俺は手裏剣を手にもつ。

ギョオオオオオオと奇声を発しながら、こっちに迫ってくる。

「君、武器は？」

飛鳥に聞く。

「一応持ってます。」

飛鳥は、メリケンサックを手に装着した。

「武器ってそれ？」

「もちろんです。」

それじゃあ、あの魔物は倒せないだろ。と思ったがあえて言わない。

町のほうからアナウンスが流れる。

さっきのがたいのいい兵士の声だ。

「あー。あー。おい！さっきの侵入者ども！きいてるか？お前らは、この町の兵士達を攻撃した。よって死刑だ！その魔物に食い尽くされちまいな！」

おぼえてやがれとか言ってたときと比べて、全然声のトーンが違う。

まあ、そんなことを気にしてる場合じゃない。

今はこの魔物を倒さなければ。

俺は、奇声を上げながら迫ってくる魔物のほうをにらみつけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7048y/>

幸せの入手法

2011年12月28日04時50分発行